

IUFRO-J NEWS

No. 94 (2008.7) —

IUFRO 理事会報告

東北大学大学院生命科学研究科 中静 透
(IUFRO 理事)

2008年のIUFRO理事会は、当初拡大理事会としてケニアのナイロビで開催する予定であったが、政情不安定のため、今年の2月になって、急遽モロッコのマラケシュに変更となり、拡大理事会も理事会に変更された。そのため、各ディビジョンの副コーディネータが出席しない、少人数の（といっても30人くらいだが）会議になった。4月28-29日に理事会、30日にシンポジウム「森林と人間の健康」が開催され、5月1日にはアトラス山脈へのエクスカージョンが行われた。

1. 理事会

IUFRO 理事長の Dong Koo Lee 氏の挨拶と議題の承認のあと、ホストであるマラケシュ森林研究センター長の Said El Mercht 氏の歓迎の挨拶があり、前回の拡大理事会の議事録の承認が行われて、理事会の討議が始まった。また、理事長、研究担当およびポリシー担当の両副理事長、事務局長から1年間の簡単な総括があった。気になったのは、新しく15の組織がIUFROに加わった一方で46の組織がIUFROから離れているということで、全体に縮小傾向にある。この中には日本の組織も含まれており、事務局長の Peter Mayer 氏からは日本の現状を心配していると、個人的な場で話があった。以下、型どおりの部分を省略して、重要な議題の議論と結果を紹介する。

〈予算と決算〉

昨年の決算と今年の予算が承認されたが、引き続き予

算状況は苦しい。そこで、Friend of IUFRO という制度を新たに作って、サポートしてくれる団体を増やそうという提案がなされ承認された。この制度によれば、資金の提供額に応じて4段階にわけ、IUFROの大会に参加できるとか、理事会のオブザーバーになれるとか、クラスに応じた特典を提供する。さらにアイデアを練って実行されることになった。

〈組織〉

各ディビジョンのコーディネータと副コーディネータ、ディビジョンコーディネータと研究グループのコーディネータの連絡が、必ずしもうまくいっていないため、今後は、各研究グループのコーディネータのうち最大3人をディビジョンの副コーディネータにするような仕組みにし、その選出にはディビジョンコーディネータが深くかかわることになった。

オーストリア政府から、IUFROをさらにサポートするにはIUFROが各国政府に認められた国際機関になるとよいのではという提案があり、その是非を検討した。国際機関になると、政治的な性格が強くなる可能性があり、IUFROの本来の良さがなくなるということで今後もその方向性は考えないという結論になった。

〈各ディビジョンからの報告〉

Division 1

今年度行われる集会が紹介された。このなかには、9月に北海道で開催されるブナの集会や10月に静岡で開

催される異齡林の集会も紹介された。また、8月にスウェーデンの Umeå で開催される気候変動に関係した集会は、政策に対する科学の貢献など分野融合的な課題もとりこんでいる。

Division 2

最近話題となっている、分子レベルでの育種、気候変動、生物エネルギー分野でほかのディビジョンと共同での活動を強めている。また、伝統的育種とゲノミクス、遺伝子組み換え樹木やバイオテクノロジーを使った生物エネルギー分野などに力を入れる。

Division 3

環境に配慮した技術などの面で政策担当者との共同を深めている。また、ディビジョン全体会議を6月に札幌で開催し、インターネットを使った新しい情報システムをテストする。新しい話題としては、温暖化緩和に関連した生物燃料とライフサイクル分析、土地利用の正確な把握などが指摘された。

Division 4

植林と生物多様性が重要なテーマとなりつつある。また、Division 1 と共同で Umeå の会議を開催する。持続的利用のための研究と意思決定に関するモデルが COST (European Cooperation in the field of Scientific and Technical Research) との共同で動き出した。

Division 5

台湾で2007年10月にディビジョン全体会議開催を成功させた。Umeå の会議にも参加する。今後は、森林バイオマスを利用したエネルギーと化学物質に力を入れる。

Division 6

2007年8月にフィンランドでディビジョン全体会議を開催して成功した。今年は11の研究集会を11月までに計画しており、年2回のニュースレターを発行する。ディビジョンを2つに分ける(景観と自然、政策と研究マネジメント)ことを検討している。

Division 7

現在の複雑すぎるディビジョンの構造をもっとシンプルにしたい。気候変動と森林衰退、病害虫のグローバルな移動、人工林の病気、抵抗性の GMO、生物燃料などが重要な課題となりつつある。Umeå の会議にも参加する。また、ディビジョン間をまたがる会議が重要になっている。

Division 8

非常に多くの WP (ワーキングパーティ) が動いていて、整理したいがなかなか進まない。ヨーロッパの氾濫原の森林管理の出版が予定されている。生物多様性および山地林の管理の問題を推進する。気候変動とバイオエナジーに関する集会(2008年3月)が成功した。

〈ディビジョン全体の問題〉

インターネットでさかんに活動しているグループが必ずしも実際に活動しているとは限らない。次期の理事やコーディネータ選出とあわせて、組織も整理する必要がある。気候変動やバイオエナジーのように、ディビジョンをまたがる研究テーマが重要になりつつある。などの指摘があった。

〈タスクフォース〉

IUFRO は新しいトレンドを作るような動きが必要という、意見がでた。重要な課題をすばやくとりあげて組織的に動く必要がある。森林と健康(今回もシンポジウムを開いた)、気候変動(IPCC 関連記事でも IUFRO 関係者は少ない)などは今後も活動を強化すべきである。LCA と生物多様性、バイオエナジーなどの重要性も議論されたが、こうした課題に対してタスクフォースを作るなどの対応では不十分かもしれない、という指摘があり、今後の方針について引き続き議論することになった。

Endangered Species and Nature Conservation

これまでコーディネータであった、Bob Szaro 氏が交代する。後任は彼自身が探し、理事会に諮ることになった。

Forests and Carbon Sequestration

2007年に二つの出版がなされた。

Forests and Genetically Modified Trees

14章からなる書籍を出版する予定で、その進行状況が報告された。

Traditional Forest Knowledge

北米とアジア(中国)で集会を開いた。アジアの集会のプロシーディングスが IUFRO World Series で出版される。生物多様性の SBSTA での IUFRO のサイドイベントで発表した。さらにアフリカでの集会を計画中である。

Communicating Forest Science

有名新聞(1994-2004)を調べてみると、森林関係の記事そのものは増加しているのに、森林関係の研究者が登場することが少ない。これは、森林研究者とメディアのコミュニケーションがうまくいっていないことによる。単なる宣伝だけではなく、社会科学的なアプローチも必要である。また、途上国の研究者のコミュニケーションスキルもトレーニングしたほうがいい。手始めに、理事メンバーを対象として半日のトレーニングコースを企画する。また、IUFRO 内部のコミュニケーションを強めるために、現在までに24のメーリングリストが作られた。ただし、それらがすべてアクティブとはいえない。さらに、インターネットを活用したコミュニ

ケーションの強化策を考えている。

Forests and Human Health

2007年8月にキックオフ集会を開催し、今回の理事会の際にもシンポジウムも行った。今後はミレニアムエコシステムアセスメントで使われている概念を取り入れて、分野横断的に活動する。

Forests and Water Interactions

コーディネータの Ian Calder が、健康上の理由から今後のことを考慮中である。

Forest Science-Policy Interface

8月にUmeåで集会を開く。政治科学と社会学と統合した形で進めたい。US Forest Service が協力する。

Illegal Logging and FLEGT (Forest Law Enforcement, Governance and Trade)

2007年1月と7月に集会を開催した。この問題には森林の管理者を巻き込み、最新情報をもとにしたワークショップが必要である。今後も精力的に集会を開き、出版も行う。

Improving the Lives of People in Forests

2007年5月に集会を開いた。現存の適応的共同管理(ACM)の事例を集めて出版したい。CIFOR から4冊の本を出版する。SPDC との共同が必要である。

〈特別プログラム、特別プロジェクト〉

Global Forest Information Service

2007年5月から稼働を開始した。英語、スペイン語、フランス語、フィンランド語、ドイツ語で、ニュースやイベント情報を見ることができ、ロシア語、韓国語もインターフェースを構築中である。現在90の組織が加盟している。FAOとKFRIの貢献が大きい。

Special Programme for Developing Countries

2007年には、Scientist Assistance Programmes (SAP) を2回開き、45人が途上国から参加した。政策と科学のインターフェースに関する集会を4回(89人)開催したほか、“Keep Asia Green”やForestry Research Network for Sub-Saharan Africa (FORNESSA)とも協働した。

Special Project “World Forests, Society and Environment”

2007年にヨーロッパで、2008年に南アメリカで、2009年にはアフリカで政策提言書を出版する予定である。

Joint CPF Initiative on Forest Science and Technology (and report on Adaptation of Forests to Climate Change)

IUFRO がリードして、UNFCC への助言機関グルー

プとして、CPF (Collaboration Partnership of Forest) Initiative が2007年5月に発足した。2007年11月にExpert Panel on Adaptation of Forests to Climate Changeが発足し、Risto Seppälä 前 IUFRO 会長が議長となった。2008年2月に第2回のExpert Panel Meetingが開かれた。

〈IUFRO Strategy 2006–2010 の実行状況〉

IUFRO 活動の地域間格差を埋めるべきである。また、理事会とは独立のシンクタンクなどを設ける、理事会でもっと時間をかけて議論するなど、新たな重要課題のとりこみをいかに行うかなど改善が必要である。

〈政策提言〉

政策提言書を出すことの重要性が議論された。ただし、誰に向けて出版するのか、その使い方などをもっと議論する必要がある。科学的事実にもとづく、政策ガイドというような性格がよく、IUFRO で承認したものを出版する必要があるという点で一致した。

〈IUFRO Strategy 2011–2014 に向けて〉

原稿の準備は副理事長の N. E. Koch が中心となる。森林や林業をもっと他の分野にアピールするような方向性を出したい。review panel も作る。運営委員会では、Analysis of Strengths, Weaknesses, Opportunities and Threats (SWOT) も考えている。一方では、IUFRO 会員であることのメリットや、機関と結びついていない会員も多く、そういう研究者への対応も問題となった。

〈IUFRO Congress〉

科学委員会では、気候変動やほかの新しい課題に関するテーマが多いことが指摘された。毎日、プレナリーと3つのサブプレナリー、全体で140のセッションが計画されている。要旨をセッションのオーガナイザーが評価する。要旨はIUFRO 公用語でいいが、ウェブサイトは英語のみ。プレナリースピーカーを検討中であることも報告された。組織委員会からは、ホームページが3月に立ち上がったこと (<http://www.iufro2010.com>)、ロゴを決めたこと、2008年には1st announcementを出すこと、などが報告された。

〈他の委員会からの報告〉

Publication Committee

CAB International は、森林関係の出版にあまり興味がないので、Springer などとの交渉を進める。IUFRO

としてレビューなしの出版物は出版すべきでない。

Honours and Awards Committee

Distinguished Service Award (DSA) の選出規定に関して疑義がだされ、今回の理事会まで決定が持ち越しになった。他の賞については、2009年の1月1日から1月末日に受け付けるので推薦を促された。これらの選考については、地域やジェンダーの考慮をする。各ディビジョンの推薦は9月末が締め切り。ポスター賞は、主著者が35歳未満で、IUFROの会員機関に所属していることが条件という確認がなされた。

Nominating Committee

次期の理事に関するノミネーションのレターが2008年9月に会員機関に送られる。2009年の理事会で決定する。

〈理事の構成、役割と責任〉

運営委員会から、1) すべての理事は同じ情報、会議、議論、決定に関与する、2) 再選は妨げる、3) 明確な役割分担と責任を担う、4) 運営委員会は事務局と協力して理事会の準備をする、という提言があり了承された。理事の選出には、地域とジェンダーを考慮する。拡大理事会は、理事任期の最初と最後のみとし、毎年の会議は理事会とすることが了承された。

〈他の国際組織との連携〉

WWF との MoU の締結を手続き中。ITTO から、GFIS および SPDC へのサポートが得られる。ICSU の正式メンバーとなった。IUCN との MoU も働きかけている。CBD とは Forest Work Program と GM Trees で協働。UNFF とは CPF で協働。UNFCC では expert panel を構成。

FAO

2009年の世界森林会議（ブエノスアイレス）では、IUFROの協力をお願いする。

IFSA-International Forest Student Association

現在40ヶ国が参加で拡大中。地域集会も行う。2008年以降のIFSA Strategyを策定中。

〈次回の理事会〉

ブエノスアイレスの世界森林会議の開催とあわせて2009年10月16-17日に開催する。シンポジウムは世界会議の中で行う。2010年の理事会は世界大会（10月23-28日）の直前（20-21日）に行う。

2. 森林と健康に関するシンポジウム

2日間の理事会のあと、3日目（4月30日）にタスク

フォース「森林と健康」の主催するシンポジウムが開かれ、森林からもたらされる薬効のある植物開発や、アフリカにおける感染症の現状などの報告があったあと、タスクフォースの進め方などに関する議論が行われた。参加者は、タスクフォースの委員会メンバーと理事会メンバーを中心として30人程度で、日本からも、千葉大学の宮崎良文氏を始めとして数名が参加した。

3. エクスカーション

4日目（5月1日）に、アトラス山脈へのエクスカーションが行われた。行くまでは砂漠の国と思っていたモロッコであるが、4000mをこす山岳地帯を南部にもち、ここでは森林が成立する。ただし、河川沿い地域と標高の特に高い2500m以上の地域で、河川沿いにはクルミ、斜面にはマツ、ビャクシン、セドゥルス類などが植栽されている（写真-1、写真-2）。とくにクルミ類は工芸品に使われ、値段が高いということであった。用材とし



写真-1 標高3000m付近のJuniperusの森林



写真-2 河川沿いに植えられているクルミの森林

て使われるような立派な森林はほとんどない。標高2600mくらいにはスキー場もあり、意外な思いをしたが、リフトもロッジもあり、ヨーロッパからのお客さんも多いらしい(写真-3)。

マラケシュの町は、世界遺産にも指定されている歴史ある町で、会議日程中にも、夜には旧市街での食事などでユニークな文化を堪能させていただいた。会議やエクスカージョンをアレンジしていただいた、Mohammed Ellatifi 氏に感謝したい。今回の理事会参加にあたってはIUFRO-Jより旅費の支援を受けました。記してお礼します。



写真-3 標高2700m付近の草原
中央の山腹がスキー場に使われている。

ユフロ第3部会全体会議

—天然資源利用に向けて環境的に健全な技術を探る—

ユフロ第3部会国際会議実行委員会 有賀一広・櫻井 倫

1. はじめに

2008年6月15～17日、ユフロ第3部会全体会議—天然資源利用に向けて環境的に健全な技術を探る—が札幌コンベンションセンターで開催され、18～20日にエクスカージョンが行われた。この会議はIUFRO第3部会をはじめの全体会議という位置づけで、2005年にブリスベンで開催された第22回ユフロ世界大会におけるビジネスミーティングにおいて、第3部会コーディネータであるスイス連邦工科大学 Hans HEINIMANN 教授より、副コーディネータである東京大学酒井秀夫教授に開催が要請され、森林利用学会の会員を中心に実行委員会が組織され、開催の運びとなったものである。

参加者は日本から51名、外国からは16カ国49名、計100名で、Don Koo LEE ユフロ会長はじめ、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、韓国、台湾、マレーシア、スペイン、イタリア、スイス、オーストリア、ドイツ、スウェーデン、フィンランド、スロベニア、チェコ、ポーランドなどから広く集まった(写真-1)。

2. 開催趣旨

「Our Common Future」と題するBrundtlandレポートから20年経ったが、適切な進路を作り出すための知識や

道具の開発にまだ直面している。環境的に健全な技術は、人類の共通の未来を、より経済的に発展可能で、より生態的に健全で、そして両者が両立しうようになるための重要なチャレンジである。森林作業工学および経営の分野は、この大きな問題に直接対峙している。本会議では、研究者、専門家、森林作業工学および経営の専攻生が一同に会し、森林資源利用のための環境的に健全な技術の方向性や方策に関する考え方やアイデアを交換することを目的とする。

3. オープニングセレモニー

15日夜、コンベンションセンターで登録とアイスブレイクが行われ、16日午前9時よりオープニングセレモニーが始まった。最初に山田壽夫北海道森林管理局長



写真-1 札幌コンベンションセンター前における参加者

がパワーポイントを使用した北海道国有林の紹介を行った。荒川剛北海道庁森林環境局長より北海道林業の説明があり、次いでHEINIMANN 第3部会コーディネータ、LEE ユフロ会長(写真-2)、酒井秀夫森林利用学会会長より歓迎の挨拶があった。

4. 基調講演

基調講演は16日のオープニングセレモニー後と17日の朝と昼食後に3件が行われた。最初の基調講演はHEINIMANN 教授より「Forest operations engineering and management-perspective and challenges」と題して、これまでの林業工学に関するパラダイムが、単なる木材伐採から、時間観測、機械化、システム化、ネットワーク化へと進展していく論考と今後の展望に関する発表があった。森林工学分野では今後、4つの主要部門において、下記のようなチャレンジをそれぞれ推進していかなければならないと強調された。

1) 収穫運材工学

(1) 作業間の調和の達成、(2) センサーやセル知能などの「知能を持った機械」による技術革新および処理技術の開発、(3) 途上国への技術移転

2) 森林作業管理

(1) ビジネスマネジメントからサプライチェーンマネジメントへの移行、(2) 複雑な事象に対する数学モデルの開発・改良、(3) サプライチェーンとロジスティックスマネジメントの理論と実践のギャップ解消

3) 森林作業と環境

(1) 環境的指標の森林作業システムへの適用、(2) 収穫運材の環境的評価、(3) 環境評価の計量と標準化の開発

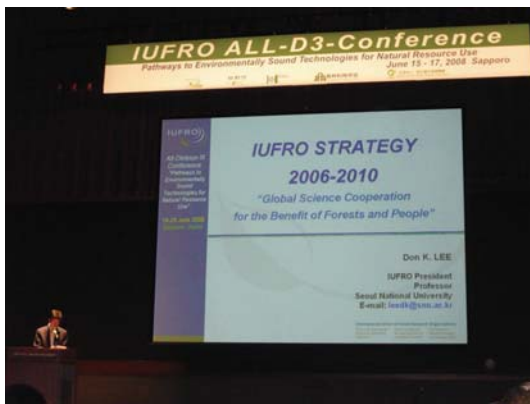


写真-2 Don Koo LEE ユフロ会長による開会挨拶

4) 森林労働科学

(1) 古典的な労働科学の知識の途上国への普及、(2) ヒューマンソフトウェアのインターフェイス改良、(3) 第2世代マネジメントの第5世代技術への適用

2件目の基調講演はpapiNet (www.papiNet.com) のTom MENIGA 博士より「Digital Supply Chain papiNet SIG standardization」と題して、ヨーロッパ、北米の380社が加盟するpapiNetにおける伐採から製材・加工までのサプライチェーンにおいて、協働、情報共有、共有意思決定などによる木材供給過程の改革への取り組みに関する発表があった。

3件目の基調講演はスウェーデン森林研究所SkogforskのBjörn LÖFGREN 博士より「Human Machine Interaction-The past, present and the future」と題して、スウェーデンにおける機械化の流れ、その中でもHuman Tool InteractionからHuman Machine Interactionへと続く林業作業者の労働科学研究の流れ、今後の林業機械開発の展望(センサ融合、自動化)などに関する発表があった。なお、筆者の有賀が2006年にLÖFGREN 博士の研究室を訪問した際には、今回の基調講演でも触れられていた最適形状を検討するために試作された様々なジョイスティックや、シミュレータによる作業者の操作習熟過程に関する研究などを紹介していただいた。

5. 口頭発表・ポスター発表

口頭発表・ポスター発表計70件が、9主題、11トラックに分かれて行われた。発表内容については2008年秋に発行予定のプロシーディングスを参照されたい(問い合わせ先: 森林利用学会事務局)。

トラック11: 林業機械 (口頭4件, ポスター1件)

トラック12: 収穫システム (口頭4件, ポスター4件)

トラック13: バイオマス収穫システム (口頭4件, ポスター2件)

トラック14: 路網計画 (口頭3件, ポスター5件)

トラック21: システム分析A (口頭3件, ポスター2件)

トラック22: サプライチェーンマネジメント (口頭6件)

トラック23: システム分析B (口頭2件, ポスター4件)

トラック24: システム分析C (口頭4件)

トラック31: 環境インパクト (口頭5件, ポスター4件)

トラック32: 環境的評価 (口頭5件)

トラック33: 労働科学 (口頭6件, ポスター2件)

6. チュートリアル

モンタナ大学 Woodam CHUNG 博士による「Road Network Planning」と HEINIMANN 教授による「Precision Forestry」の2つのチュートリアルが開催された。CHUNG 博士は南アフリカの林業・林産会社 Sappi などでも使われている運材計画ソフトウェア NETWORK2000、北米を中心に世界各地で使われている架線設計プログラム LoggerPC の Windows 版後継ソフトウェアである SlopeRunner2.0、架線集材費用と運材費用を最小化する最適な架線・路網配置を探索するソフトウェア CPLAN など多数のプログラムを開発しており、CHUNG 博士のチュートリアルでは路網計画に関する既往の研究および路網計画で使われる数学的手法などに関する説明がなされた。

7. ビジネスミーティング

ビジネスミーティングでは、2005年第22回ユフロ世界大会から現在までの活動状況および2010年にソウルで開催される第23回ユフロ世界大会までの活動予定が各グループより発表された。第22回世界大会において第3部会が主体となったサブプレナリーセッションが少なかったこと、第23回大会のサブプレナリーセッションの公募が2008年秋に行われることが説明され、第3部会として積極的に参加しようとの呼びかけが HEINIMANN 教授よりあった。

ビジネスミーティングの最後に、LEE 会長より本会議の運営にとくに貢献した尾張敏章（東京大学北海道演習林）、佐々木尚三（森林総合研究所北海道支所）、渡辺一郎（北海道立林業試験場）、櫻井倫（東京大学）、鈴木秀典（森林総合研究所）らの各氏に感謝状が手渡された。



写真-3 自動植付機械

8. エクスカーション

エクスカーションは68名が参加し、18日に、まず森林総合研究所北海道支所を訪問し、同所で開発している自動植付機械（写真-3）と林業用全方向移動形車両のデモンストレーションを見学した。なお、本会議は（社）国土緑化推進機構の助成を受け、緑の募金事業の一環として、地球温暖化防止のための普及活動を行い、各訪問地で植樹を行った。次に北海道立林業試験場を訪れ、カラマツとグイマツの交配成果を見学し、とくに炭素固定能力の高いカラマツの説明を受けた。

19日は東京大学北海道演習林を訪れ、苗畑、天然林択伐施業、それを支えている高密度循環路網を中心に見学した（写真-4）。林内での昼食時は、元演習林職員鳥強之作詞作曲「森をつくろう」はじめ世界中でなじみ深い数々の名曲を、コカリナというハンガリー木製楽器の演奏で聴いた。聞き慣れた曲でも森林内ではことさらに心に染み入ってくる。

20日は平取町立二風谷アイヌ文化博物館を見学し、アイヌ文化の継承に欠かせないオヒョウニレの植樹を行い、昼食では自然の素材を活かしたアイヌ伝統料理に感銘を受けた。1992年のリオデジャネイロ「地球サミット」で、天然資源の持続的利用は同時に生態、社会、経済における持続性を満たさなければならないとされ、社会的側面には先住民の権利が含まれるが、この6月にアイヌ民族が先住民族であることが国会決議されたばかりである。午後から月3,000m³のチップを生産し、JAS認定の工場として月500m³の製材を生産販売している千歳市（株）丹治秀工業の工場を見学した。次に2004年9月に発生した風倒被害木の搬出現場を見学した。札幌のビール工場のレストランでのフェアウェルパーティでは、参加者が大いに盛り上がった。



写真-4 東京大学北海道演習林の天然林択伐施業見学

9. おわりに

本会議では、当初の目的のとおり、各国の研究者、専門家、学生が多数集まり、基調講演、研究発表、エクスカーションにおいて有意義な議論を重ねることができ、参加者同士親交を深めることができました。コンベンションセンターの会議中、札幌国際プラザの好意のもと、同業者向けに着物着付け教室や野幌森林公園見学などのカルチャー・プログラムが生まれ、好評であった。今回、国内各大学から森林工学専攻の学生19名が受付や会場設営・運営に協力してくれた。当初、外国からの参加者に対して尻込みする学生もいたが、会議、エクスカーションを通じて打ち解けあうことができた。今後の人生に

とって良い経験になったものと思われる。

なお、本会議の3週間後に洞爺湖においてG8サミットが開催されたが、本会議は同サミットを支援するリンクージ・セミナーとしても位置づけられている。

最後に、本会議開催にあたり、林野庁、北海道、富良野市、(社)国土緑化推進機構、(社)林業機械化協会、美しい森林づくり全国推進会議、(財)札幌国際プラザ、北海道新聞社、森林利用学会より後援を受け、各企業、協会より協賛をいただいた。ユフロ-Jからは研究集会事務局助成をいただいた。ここに厚く御礼申し上げます。本報告を取りまとめるにあたり、宇都宮大学4年生、伊藤要、村上文美諸氏の報告も参考にさせていただきました。

IUFRO-J 平成 20 年度機関代表会議

平成 20 年 3 月 28 日に東京農工大学本館 23 号室において、標記会議が開催されました。A 会員、B 会員合計 18 機関代表に出席いただき、鈴木和夫議長の司会で議事が進められました。以下では、代表者会議での審議、承認された議題の概要を報告します。なお会議開催に際して東京農工大学の第 119 回日本森林学会大会運営委員会の皆様に大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

I. 平成 19 年度会務報告

1. 一般会計

1) IUFRO-J News 発行

No.91 (2007.6) : 議長就任にあたって・インターブ
リベント 2006 国際シンポジウム概要報告・
IUFRO 関連集案内・IUFRO-J 平成 19 年
度機関代表会議報告

No.92 (2007.11) : IUFRO 拡大理事会報告—現在
の大きな動き・IUFRO 拡大理事会報告・
IUFRO Policy Committee 報告・IUFRO 拡
大理事会後エクスカーション報告・IUFRO
国際研究集会「次世代のための森林の役割—
森林資源管理の哲学と技術—」
FORCOM2004 概要報告・IUFRO 分科会
「材木の根株腐朽病に関する国際集会」に
参加して・IUFRO ワーキンググループ
S2.02.07 (カラマツ属の育種と遺伝資源) の
国際シンポジウム : Larix2007 の参加報告・
国際シンポジウム「東南アジア産木材の樹種

識別および産地特定技術」開催報告

No.93 (2008.3) : IUFRO と気候変動 気候変動枠
組条約第 13 回締約国会議、森林の日・森林
および森林管理の気候変動への適応に関する
IUFRO 国際集会 案内・IUFRO 会員登録
と年会費の支払いについて・2008 年度に日
本で開催される IUFRO 国際研究集会案内
ユフロ D3_会議—天然資源利用に向けて環
境的に健全な技術を探る—第 8 回 IUFRO
国際ブナシンポジウム・IUFRO D1_5 複雑
構造をめざす造林技術とその実行可能性 : 森
林生態系の多目的機能と持続可能性のための
デザイン手法・IUFRO D4「多目的・長期的
な森林の管理計画の樹立に向けて」

会誌送付会員 (平成 20 年 3 月 14 日現在 (会費納
入者数)) の現状

A 会員 : 26 機関 (669) 名分納入済み (会員数前
年度比 : 35 人減)

B 会員 : 19 機関 17 機関納入済み (会員数前年
度比 : 2 人減, 1 口減)

事務局注 : 会議当日現在手続中であった 2 機関に
ついてもその後納入が終了しています。

C 会員 : 37 名 (内 1 名休会中) (34) 名納入済み
(会員数前年度比 : 10 人増)

賛助会員 : なし

2) 理事会出席助成

2 名に対し 370,599 円 (2 名分合計)

- 3) IUFRO 関連研究集會事務局・参加助成
事務局 (20 万円)
該当者なし
参加 (10 万円)
来田 和人 (北海道立林業試験場)
徳田 佐和子 (北海道立林業試験場)
小野里 光 (群馬県林業試験場)

- 4) IUFRO-J eNews の開始
平成 19 年 9 月より配信を開始した。
当初の配信先は、AB 会員の代表・連絡員、C 会員のうち、事務局がメールアドレスを把握している人。AB 会員機関からの連絡に基づき、それぞれの機関に所属する会員を配信先に追加し、合計 115 名に配信。
平成 19 年 9 月 5 日 [1] IUFRO-J メールングリスト開設
平成 19 年 9 月 5 日 [2] 国際シンポジウム後援
平成 20 年 2 月 14 日 [3] 第 13 回ユフロ世界大会大会テーマ案の募集

現在は事務局主事のメールアドレスのみから配信できるように設定。

- 5) 国際シンポジウム後援「東南アジア産木材の樹種識別および産地特定技術」
主催者 (森林総合研究所) からの申請を事務局で審議し、「東南アジア産木材の樹種識別および産地特定技術」の後援を行った。後援に先だて、IUFRO-J 事務局から同シンポジウムの IUFRO への登録を主催者に依頼し、主催者が対応したことをうけ、後援を承認した。
後援内容は、IUFRO-J eNews での案内、シンポジウム記録の IUFRO-J News (No.92) への掲載。
- 6) 長期滞納会員の解消
組織変更により森林関連部局が無くなった機関、担当者交代により名簿の不備や会費滞納があった機関、などの方々とは個別に連絡をとり、会員を継続して下さる方のみ滞納分および当年度分の会費納入を依頼した。また、連絡がとれない個人会員については退会とした。
- 7) 新規会員の勧誘
IUFRO-J News を通じて勧誘依頼を継続した。

2. 平成 19 年度役員

議長 鈴木 和夫 (森林総研)
監事 本山 芳裕 (日森協)
佐々 朋之 (林 振)

幹事 沢田 治雄 (森林総研)
田淵 隆一 (森林総研)
主事 藤間 剛 (森林総研)

II. 平成 19 年度会計決算報告

1. 一般会計 (平成 20 年 3 月 14 日現在)

【収入】

科目	予算	決算	備考
前年度繰越金	1,809,902	1,809,902	
会費 A 会員	691,000	669,000	H18 年度以前の会費を H19 年度に払った団体・ 個人 H20 年度以降の会費を H19 年度に払った団体・ 個人
B 会員	108,000	92,000	
C 会員	37,000	32,000	
前年度未収分	165,000	57,050	
前納分	0	1,000	
雑収入	1,000	620	利息、IUFRO 専門用語集
単年度収入小計	1,002,000	851,670	
合計	2,811,902	2,661,572	

【支出】

科目	予算	決算	備考
情報活動費	400,000	377,566	J-News 印刷費 (No.91, 92, 93)・発送料・通信費
内訳 J-News 91 印刷	100,000	91,738	16,000 (No.91), 16,000 (No.92), 13,240 (No.93) 切手代
J-News 92 印刷	100,000	152,880	
J-News 93 印刷	100,000	86,698	
J-News 発送料	50,000	45,240	
通信費	50,000	1,000	
会議費	30,000	17,000	平成 19 年度機関代表会議 (九州大学)
旅費	300,000	370,599	理事会出席助成 (鎌田・酒井)
雑費	10,000	12,000	振り込み手数料, 送金手数料
予備費・助成	300,000	300,000	事務局・参加助成 (小野里・徳田・来田)
単年度支出小計	1,040,000	1,077,155	
次年度繰越	1,771,902	1,584,417	
合計	2,811,902	2,661,572	

III. 平成 19 年度監査報告

平成 19 年度 IUFRO-J 事業会計について監査した結果、各種帳簿ならびに証拠書類はいずれも、正確に整理・記録されており、本件経理は適正であったことを認める。

平成 20 年 3 月 21 日
IUFRO-J 監事

財団法人 林業科学技術振興所 つくば支所長
佐々 朋幸 印

平成 19 年度 IUFRO-J 事業会計について監査した結果、各種帳簿ならびに証拠書類はいずれも、正確に整理・記録されており、本件経理は適正であったことを認める。

平成 20 年 3 月 21 日

IUFRO-J 監事

社団法人 日本森林技術協会 理事

本山 芳裕 印

IV. 平成 20 年度事業計画案

1. 一般会計事業

1) IUFRO-J News 発行

番号（予定時期）：掲載記事に関する事務局案
No.94 (2008.6)：理事会報告，集会報告，機関代表会議報告

No.95 (2008.12)：集会報告，理事会報告

No.96 (2009.3)：集会報告

各 1000 部印刷し，会員配布

IUFRO および IUFRO-J の目的に添った内容で，会員相互に広く共有すべき記事を掲載したいと考えています。積極的に事務局にご相談ください。

2) 理事会出席助成

4 月 28 日～5 月 1 日 モロッコ

3) IUFRO 研究集会事務局・参加助成

参加助成：該当無し

事務局助成 4 件

第 8 回 IUFRO 国際ブナシンポジウム 20 万円
ユフロ D3 会議—天然資源利用に向けて環境的に健全な技術を探る—10 万円

IUFRO D1-5 複雑構造をめざす造林技術とその実行可能性 10 万円

IUFRO D4 多目的・長期的な森林計画の樹立に向けて 10 万円

助成事業の概要メモ

○助成申請は随時受け付けている。

○12 月末で集計し，選考委員会に諮り，助成対象を決定。

○応募の詳細は資料 4 参照。

○事業のねらい：会費納入のメリットを目に見える形にして，会員増をはかる。

○具体的内容

「IUFRO 関連集会 事務局・参加」年間総額 50 万程度

事務局：20 万 / 件，参加：10 万 / 件目途（発表は海外に限る）

選考委員会（現在，5 名で構成）で決定。

応募資格：会費を納入している会員に限る。

助成を受けた者のオブリゲーション：J-News での報告。

4) 研究集会の後援

5) 長期滞納会員の解消

長期滞納中の機関会員はなくなった。個人会員についても H20 年度中に整理する予定。

6) 新規会員の加入勧誘

V. 平成 20 年度予算案

予算案立案の基本的な考え方

○一般会計予備費を関連研究集会助成に活用する方向を継続する。

○単年度収支に心がける。

1. 一般会計予算案

【収入】

科目	予算	備考
前年度繰越金	1,584,417	
会費 A 会員	687,000	
B 会員	108,000	
C 会員	34,000	
19 年度未収分	35,000	うち 11,000 円は H20 年 3 月 21 日入金済み うち 15,000 円は H20 年 3 月中に入金予定 うち 33,000 円は H20 年 3 月 21 日入金
18 年度以前未収分	45,000	
次年度前納	0	
雑収入	1,000	利息，専門用語集
単年度収入小計	910,000	
合計	2,494,417	

【支出】

科目	予算	備考
情報活動費	400,000	J-News 印刷費 (No.94, 95, 96)・送料・通信費
内訳 J-News 94 印刷	100,000	
J-News 95 印刷	100,000	
J-News 96 印刷	100,000	
J-News 送料	50,000	
通信費	50,000	封筒，切手代等
会議費	30,000	平成 20 年度機関代表会議 (東京農工大学)
旅費	150,000	理事会出席助成
雑費	10,000	振り込み手数料，送金手数料
予備費・助成	500,000	事務局助成
単年度支出小計	1,090,000	
次年度繰越	1,404,417	
合計	2,494,417	

VI. 役員選出, 承認

平成 20 年度役員候補

役員	氏名	所属	区分	(任期)	[役職による指定]
議長	鈴木 和夫	森林総研	現	(H19 年 4 月～)	[理事長]
監事	本山 芳裕	グリーン航業(株)	現	(H16 年 10 月～)	
幹事	佐々 朋幸	林 振	現	(H19 年 4 月～)	[国際研究担当 COD]
	福山 研二	森林総研	新	(H20 年 4 月～)	
主事	田淵 隆一	森林総研	新	(H19 年 4 月～)	[国際研究推進室長]
	藤間 剛	森林総研	現	(H18 年 4 月～)	

議長、幹事および監事は機関代表会議で選出、主事は議長が委嘱。(会則第 11 条)

任期は 2 年、再任は妨げない。(会則第 12 条)

VII. 主な討議事項

幹事の交代

IUFRO-J の幹事は、機関代表会議で選出、承認を受けることになっています。前幹事の沢田治雄氏が平成 20 年 3 月 31 日に森林総合研究所を退職されることを受け、4 月 1 日付けで任命される森林総合研究所国際研究担当 COD に、幹事を依頼することが事務局から提案され、満場一致で承認されました。

助成について

IUFRO 役員の理事会出席助成については、単年度 1 名につき 15 万円を上限とすることが確認された。

研究集会事務局・参加助成選考委員会での判定基準は IUFRO の国際会議であるかどうか、助成の必要性および効果、総額 50 万円の年度予算におさまるかどうか等であると紹介された。

機関代表会議の開催日時について

ポスター講演のため今回の会議に出席できなかった方から、森林学会大会の昼休み時間の代表会議開催はポスター講演のコアタイムとぶつかるので避けて欲しいとの意見があった。12:00～13:00 の昼休みのうち 12:15～12:45 を会議時間とするくらいしか対応策がなく、事務局としても苦慮していることを説明した。具体的な改善策が出ないため、今後の検討課題とし、事務局への意見を待つこととした。

[参考]

IUFRO 役員 (2006～2010)

理事 General member
 中静 透 (東北大学)
 第 3 部会 Deputy Coordinator
 酒井 秀夫 (東京大学)
 第 4 部会 Deputy Coordinator
 吉本 敦 (東北大学)
 第 7 部会 Deputy Coordinator
 鎌田 直人 (東京大学)

アジア太平洋森林侵入種ネットワークの紹介

(Asia-Pacific Forest Invasive Species Network: APFISN)

森林総合研究所 藤間 剛

アジア太平洋森林侵入種ネットワーク (APFISN) は、アジア太平洋地域の持続的な森林管理に悪影響をもたらす侵入種に対応するために設立された。APFISN は 33 ヶ国が参加する国連食糧農業機関 (FAO) の地域

枠組みアジア太平洋森林委員会 (APFC) による協力的な取り組みのひとつである。APFISN は、アジア太平洋地域における森林移入種の検出、予防、監視、根絶、制御を目的に国家間協力を推進する。

APFISN の活動目標

- ・アジア太平洋地域における森林侵入種に対する注意喚起。
- ・参加国間での森林侵入種に関する情報の交換と共有の推進。
- ・専門的技術、研究成果、訓練および教育機会へのアクセスの向上。
- ・参加国が森林侵入種を管理し新たな侵入を予防する能力の向上。
- ・森林侵入種がもたらす危機に対応するための協力と地域協力戦略の構築。

APFISN の活動

APFISN の短期および長期活動戦略は、APFC により立案・承認される。APFISN は参加国代表から選出された執行委員会、APFISN コーディネータ、参加各国が独自に指名する国別コーディネータにより運営される。

APFISN の活動内容

APFISN は参加国間の調整と協力の推進により、アジア太平洋地域の重要な森林侵入種の拡散と定着を阻止するため、次の活動を実施する。

- ・潜在的な侵入種に対する早期警戒。
- ・迅速な検出および同定。
- ・生物学的情報、リスクアセスメント、モニタリング、制御等の技術の共有。
- ・研究、教育及び訓練機会のような専門的知識と資源へのアクセス強化。

注意喚起

参加国の政府および政策立案者に対する、森林移入種に関する情報を適切に伝え、注意喚起を継続することは、ネットワーク活動に対する政策的支援を維持するためにも、重要である。情報提供先を特定し、それぞれの相手に応じた内容、伝えかたを工夫して実施する。

- ・パンフレット、情報シート、ポスター等、一般向け印刷物の発行と配布。
- ・ニュースレター、Fact sheet 等、専門家を対象とした情報発信。

APFISN ウェブサイト (<http://apfisn.net/index.html>) の設置。

地域や生物種を絞り込んだ侵入種の危険と管理の成功例に関する DVD の作成。

ネットワーク強化のための組織体制

APFISN は、APFC の承認のもと FAO 事務局の支

援を受けて活動する。執行委員会は 6 名からなり、ネットワークの活動の方向付けを行う。APFISN コーディネータは事務局を総括し各種活動と連絡の円滑な進捗を図る。国別コーディネータは、自国内における活動の調整および情報共有を推進するとともに、他の侵入種対策に関する活動との協調をはかる。

能力向上 (Capacity Building)

APFISN は、地域の能力向上に貢献する。

森林侵入種に関する国別報告書が 11 ヶ国より提出されている。報告書には、各国における侵入種対策の現状、必要性、課題が記されている。これら報告に基づく、対応策が検討されている。

APFISN は 2004 年以來、参加国内で抱えるテーマ毎にワークショップを開催してきた。

APFISN は、参加国間の共同研究、人事交流などにより、技術移転、情報交換の効率化を期待している。

データベースおよび情報共有

APFISN は、侵入種に関する情報交換を重視する。参加国には、情報、研究結果、管理技術の交換と共有、ネットワークを通じた国別データベースの相互リンクが期待されている。手はじめとして APFISN ウェブサイトから、他の森林侵入種に関するウェブサイトへのリンクがはられている。利用可能なデータベースの特定やリンクの設定が検討されている。すでに提出された国別報告は、APFISN ウェブサイトから閲覧可能である。

APFISN 日本窓口

林野庁海外林業協力室と森林総合研究所・国際連携推進拠点（藤間）。林野庁は役職指定、森林総研は研究者ベースの対応（現 APFISN コーディネータの任期中は藤間が担当）。

APFISN のニュースレター、Workshop 等の情報を希望する方は toma@affrc.go.jp まで連絡のこと。

IUFRO-J News No. 94 平成 20 年 7 月 28 日

国際森林研究機関連合 - 日本委員会事務局

〒305-8687 茨城県つくば市松の里 1

森林総合研究所 国際連携推進拠点

TEL 029-829-8327, 8328

iufro-j@ffpri.affrc.go.jp

〔編集・発行〕